

八ノ年ヲ積テ、是マデノ流行ヲ考ルニ、轉變トハイヘド、今ノ流行今ニ始ルニモ非ズ、四十年來ヨリ有キタリタレド、其治ヲ得ザルユヘ、徒ニ過シタルナリ、一般流行トイヘド、種々ノ病症イツトテモ交リオレリ、其内ニサマデ誤治ナリトモ思ハズシテ沈重ニ至ルハ、見シラザル一種ノ症ナルベシ、願クハ予ガ志ヲ嗣デ、温疫ノ種類吾輩ノ知ザルヲ治シ得ルコトアラバ、コレニ續テ救世ノ術ヲ弘メタマヘカシ、

〔時還讀我書上〕時疫ノ流行ハ其理ヲ推知スベカラザルコトアリ、寛政七年ノ三月初旬、大君小金原ニ狩シ玉ヒテ、四五日ノ後ヨリ感冒行レタリ、其患者ノ衣袂ニ必ズ猪鹿ナドノ獸毛アリ、少キハ七八根多キハ掌ニ滿ルニ至ル、故ニ時人名ケテ御猪狩風ト云シトゾ、實ハ何ノ故ナルコトヲ審ニセザルナリ、又閑田次筆ニ、享和辛酉^年元ノ歲極月ヨリ壬戌^年ニノ正月ニ及ビ、疫邪流行ス、荷蘭人ヨリ傳ヘシトモ、去年漂流セシアンボンナドヨリ染シトモ云ヘリ、京師ハ二月廿日頃ヨリ三月廿日頃マデ行ハレ、關戸ミナ病ム微疫ナリ、其病人袂ノ中ニ必ズ薄赤キ毛アリ、或ハ一條或ハ二三條ヅ、ナリ、近江播磨ノ國々皆シカリ、怪キコトナリ、蠻人ヨリ傳ヘシ故ニ、カ、ル毛モ生ゼシヤト云ヘリ、意フニコロト同證ナランカ、彼ノ所謂羊毛瘡ハ身體ヘ羊毛ノ如キモノ、生ズルニテ自ラ別病ナリ、

〔閑田次筆一〕辛酉のとし^{○享和元年}極月より壬戌^{○享和二年}の正月におよび、長崎に疫邪流行す、予が門に遊ぶ人かしこに事ありて、一周年が間旅をせるも、病たるにつきて、いひこされしは、阿蘭陀人より傳へしとも、又去年漂流せしアンホン、その外蠻人より生せしともいふ、往年暹邏人渡來りしより、風邪流行せし例なりときこゆとなん、此邪氣長崎より九州を経て、つひに上方におよび、世間一遍になり、京は二月の廿日餘りより三月廿日ごろにおよび、每家每人病ぬものなし、近江わたりもおなじ頃とぞ、風邪に似たれども一種の疫氣なりんと、吳又可が温疫論にて思ひ合せ